

ART Tube MPを手に取り、昔を思い起こしています。昔といっても、たかだか十数年程前のことなのですがw。筆者にとっては忘れられない、真空管マイクプリアンプを初めて購入したときのことです。当時はまだ高額であった真空管マイクプリでしたが、誰でも買えるお手軽な価格と優れた携帯性でシーンを席巻したのが、このTube MPだったのです。そして筆者も、シーンに乗り遅れまいと必死で買いました。あるときは激しく攻撃的な歪を、またあるときは太くて優しいサウンドの芯を、このTube MPが広く一般のユーザーにも味あわせてくれたのです。(文：犬山博和)

挑戦と進化を止めない ART Tube MP

盟友との久しぶりの再会に、いささか興奮気味な筆者を更に驚かせたのは、Tube MPにシリーズができていくことです。コンパクトな真空管プリアンプの先駆的存在であるTube MPを筆頭に、VUメーターなどを搭載し機能を強化したTube MP Studio V3、超低ノイズ・ディスクリート回路を搭載したTube MP Project Series、更にUSB機能も加えたTube MP Project Series with USBと、挑戦と進化を止めないART Tube MP。こいつらを、これからチクチクといじり倒す訳ですが、実際楽しみでなりません。

ART Tube MP

シリーズの根幹であり、プリアンプで定評のある12AX7真空管を使ったTube MPは、純粋な真空管サウンドを味わうためだけに作られたシンプルモデル。従って、インプットにマイク、アウトプットにミキサーやオーディオ・インターフェイスをつなぐだけで、素早く真空管の醍醐味が満喫できます。今回のテストではインプットにコンデンサーマイクをつなぎ、アウトプットに

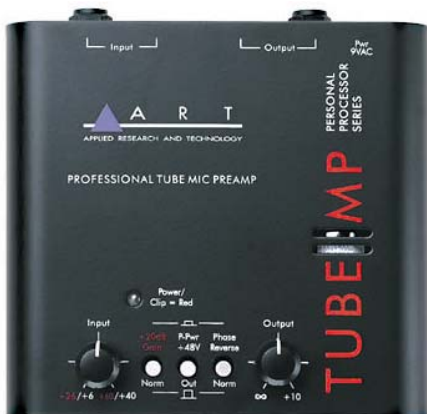


写真1 Tube MP



ART Tube MPで 始める真空管サウンド

オーディオ・インターフェイスというシステムで行ったので、イン&アウト双方にXLRケーブルをつなぎました。ちなみに、1/4"標準フォンのイン&アウトも装備しているので、マイクプリとしてのみならず、ベースやギター等のDIボックスとしても使用できます(写真2)。

さあ、まず目につくのは、パワーとクリップの状況を表示する緑のLEDです。インプットつまみは控えめに、サチュレーション発生の一歩手前で点灯する緑の状態では、オーガニックで素直に響くサウンドが。もう少しだけつまみをひねると過大入力でサウンドの所々がオーバーロードし、柔らかなサチュレーションが加わると共にオレンジに変色。ヒステリックな思いを込めてさらにインプットつまみをひねれば、LEDはグワッと真っ赤に染まり、60~70年代を髣髴とさせる凶暴で艶かしいディストーション・サウンドを得ることができます。手元つまみ1つでこれだけの幅広いキャラクターが得られるということは、エンジニアだけでなく、クリエイターにとっても大きな武器になるでしょう。

+48Vファンタム電源スイッチやトータルの最大ゲイン70dBを可能とする+20dBゲイン・スイッチ、それからドラムのマルチマイク・レコーディングなどで必要になる位相反転スイッチも搭載(写真3)。真空管プリアンプを初めて使うユーザーが、やがて成長してこのTube MPにさらに高度な要求をするようになったときに役立つポイントもしっかりと押さえています。極めて小さなこのボディには、その何十倍もの仕事をこなすポテンシャルが秘められていました。



写真2 Tube MP rear



写真3 Tube MP front

ART Tube MP Studio V3



写真4 Studio V3

やはりVUメーターです。どアナログを象徴するVUメーターに弱いのは、全人類共通の性(さが)であると筆者は信じて疑いません。トーンを落とした深みあるブルーの筐体に、チラ見せする12AX7とVUが絶妙なバランスでハマっています。物欲に直結する罪深いリルックスを持っているのが、このTube MP Studio V3です。

また、Tube MPとほぼ同サイズであるのに、搭載機能はTube MPと正反対。「あれもこれも」のデジコ盛りタイプです。Tube MPの温かな真空管サウンドを踏襲しつつ、先述VUメーターに加えて、リミッターとV3回路までも搭載し、様々な種類の用途や楽器サウンドに適するよう設計/開発がなされています。

メーター機器が一切搭載されていなかったTube MPであっても、LEDランプの色味と「聞いた感じ」だけで入力レベルの察しは充分にできたと思います。しかし、リアルタイムで機敏な反応を見せてくれるこのVUメーターで得られる安心感、やはり「あって嬉しい」機能であることに間違いありません。VUメーターの振れ幅を気にしながらStudio V3のテストを開始しました。

まず、手が伸びる先にあるのはV3回路(Variable Valve Voicing)です。ボーカル、ギター、ベース、キーボード、パーカッション等、様々な入力ソースに対し



写真5 V3

た16種類のプリセットが用意され、つまみを回すだけで簡単にプロのサウンドが得られるという機能です(写真5)。

手始めにニュートラルカテゴリーのFLATを音で聞いてみましょう。あれれ? さっきのTube MPと少し音が違う気が... このFLATがダメということではないのですが、Tube MPのサウンドと比べるとシャープな印象を受けます。オーバーロードさせたサチュレーションの感じも、やはり違うな、と。そこでV3回路のプリセットを色々変えてみると... ありました! Tube MPと同じサウンドが。ウォームカテゴリーのVALVEです。サチリ具合からしてもやはりコレでしょう。

この様な設定(配置)にしたメーカーの意図までは分かりかねますが、筆者にはFLATが間違った音ではなく、わざと狙って用意されたプリセットである気がしてなりません。何故ならば、これまでのTube MPに足りなかった“普通”というキャラクターを、このFLATに感じたからです。「時には真空管っぽくないサウンドも必要だからね...」そんな設計者の親切な提案が、筆者には見える気がするのです。

さて、それではウォームカテゴリーの中身を少しだけ掘り下げてみましょう(VALVEがTube MPのオリジナル・サウンドと仮定して話を進めます)。VOCALではローをスッキリとさせ、声の帯域が目立つようにセッティングされています。ハイなどが特にブーストされていることもないので、とてもナチュラルなボーカルのサウンドが得られるでしょう。エレクトリック・ギターのサウンドメイキングを目的としたE-GTRは、ローのカットに加えて、ミッドハイやハイをかなりブーストしてあります。ギター特有のギラギラとした質感や、カッティングの歯切れ良さを得るには適したセッティングと言えます。エレクトリック・キーボード用のE-KBDでは、ハイからミッドハイをブーストしたセッティングです。例えばローズで演奏されたサウンドの強いアタック感や、左手のアクセント的な低音フレーズを余すところなく拾いたい場合に効果的です。

基本としてイコライジングによる効果が大きいプリセットごとのキャラクターですが、音作りの方向決めのファーストステップとしては大いに利用価値があると感じました。特に“ミックスで埋もれないサウンド”を欲しているビギナーには嬉しい機能でしょう。

出力ピーク信号を正確にコントロールする、ART独自の“OPL”アウトプット・プロテクション・リミッターを利用したOPLカテゴリーも興味深いものがあります。Studio V3のリミッターの掛かり具合はインプットゲインで調整するタイプで、Urei 1176や1178と同じ。掛かりを深くするためにインプットを上げたら、その分だけアウトプットを下げなければならないタイプで非常に面倒...と思いきや、実は違っていました。操作感覚としては、一般的なりミッターにあるスレッシュホールドのパラメーターを触っているのに近いものがあります。必要な時に必要な量だけ、スピーディーにリミッターが使えるという点も、このStudio V3の見逃せないポイントでしょう。

ART Tube MP Project Series

Studio V3がTube MPをそのまま踏襲した発展系であったのに対し、こちらのTube MP Project Seriesは、Tube MPの進化系という位置付けになっています。この違いは何なのでしょう? ルックスにおいてフロントパネルや筐体に大きな変化が見られますが、“進化”とまで呼べる変化ではありません。ということは... Project Seriesのサウンドを聞いてみましょう。



写真6 Project Series

ああ、確かに違います。これが新開発の「超低ノイズ・ディスクリート回路による入力部」によるものなのでしょうか? 音を聞いたファーストインプレッションは“余裕”です。重心をしっかりと感じる低域、芯がありながらも余計な主張をしない中域、ナチュラルに伸びる高域、価格帯は差ほど変わらぬProject Seriesですが、そのサウンドはワンランク上のプリアンプを感じさせるものです。仮にTube MPやStudio V3が“おいしいところ”を寄せ集めて出すタイプだとしたら、こちらのProject Seriesは、原音が持っている世界を余すところなく出してくるタイプ。両者共にハッキリとした特長があり、このキャラクターを使い分ければ、かなり面白いミックスができるのではないのでしょうか。

操作性という面では、フロントパネルを狭い側面に配置したせいで「オペレートしづらいのではないかと」と臆測していましたが、実際に使ってみると、その様な印象は残りません。4段階に表示されるLEDメーターも入力レベルの監視には充分です。リアパネルのインプット&アウトプットもTube MPと同じ仕様であり、Tube MPユーザーが追加でProject Seriesを購入したとして

も、機材差を感じることなく自然に扱えるでしょう。また、Project Series同士を積み重ねられる形状になっているので、複数台を同時に使用しても設置がしやすく、大変便利です(写真7)。

+48Vファントム電源や位相反転といったお馴染みの機能以外にも、不要な低域ノイズをカットするハイパス・フィルターや、ナチュラルなコンプレッションが得られるFETリミッター、そしてマイクに応じて最適なインピーダンスを選択できる入力インピーダンスの切り替えスイッチも搭載という重装備。特に入力インピーダンスの切り替えは、ヴィンテージ・リボンマイク等のパフォーマンスを最大限に発揮させるのに役立ちます。

更に、このProject SeriesにUSBポートと高音質なADコンバーターを追加搭載したProject Series with USBもリリースされています。オーディオ・インターフェイスを介さず直接PCに録音したい場合は、こちらをチョイスするとよいでしょう。



写真7 スタック

コンパクト真空管マイクプリアンプ“Tube MP”シリーズ以外にも、高品位なコンプレッサーやワードクロック・ジェネレーターなどのプロ機を多くリリースする顔を持つART社。ビギナーに向けて発信するリーズナブルな製品であっても、使い捨てにならない個性と品質が備わっているのは、この辺りのノウハウが設計・開発に生かされているからなのでしょう。

久々の盟友との再会。何よりも盟友が成長し、そして今なお進化し続けていることを確かめられたことが筆者にとっては最高の収穫でした。この記事を読まれた読者の皆様にも、この興奮が少しでも伝わっていれば嬉しいです。

ARTが提案するスタジオモニター用パワーアンプ

真空管プリアンプやコンプなどのアウトプットが印象深いART社ですが、スタジオモニター用パワーアンプなどのサウンドシステムもリリースしていることをご存知でしょうか?

SLA-1およびSLA-2は、ナチュラルで忠実な音質のため、何と電源部にはトロイダルトランスを採用。スタジオから設備音響、小規模PA、クラブまで幅広く利用できる優れたパワーアンプです(写真8、9)。



写真8 100W出力のパワーアンプSLA-1



写真9 200W出力にパワーアップされたSLA-2